

A Content Analysis of American Textbooks of Cultural Anthropology : With Focus on the Changes since the Early 1990s

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桑山, 敬己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004078

アメリカの文化人類学教科書の内容分析 ——1990年代前半からの変化を中心に——

桑 山 敬 己*

A Content Analysis of American Textbooks of Cultural Anthropology: With Focus on the Changes since the Early 1990s

Takami Kuwayama

本論は、アメリカ人類学の研究および教育動向を、教科書の記述の変化を通して検討する。ケーススタディとして、Serena Nanda 著 *Cultural anthropology* の旧版と新版を取り上げる。新版の新たな特徴として、インターネットの使用、グローバリゼーションおよびジェンダーの議論がある。ポストモダニズムの影響も強く、特に認識論、民族誌の書き方、文化の概念、政治権力、芸術の章に著しい。但し旧版の進化論的アプローチも残されており、従来の「大きな物語」とポストモダニズムが共存するという理論的矛盾が見られる。またアメリカの人類学を全世界の人類学と同一視するのも問題である。こうした欠点は他の教科書にも見られる。今後はより体系的な教科書分析を行ない、異文化としてのアメリカ人類学に迫る試みが望まれる。

By analyzing changes in textbook descriptions, this paper examines the current trends in research and teaching in American anthropology. As a case study, two different editions of Serena Nanda's *Cultural anthropology* (4th and 6th editions) are compared. A most salient technological change is the increased use of the Internet. In terms of the topics discussed, globalization and gender are the two new areas to which detailed attention is given. Postmodernism has influenced the new edition's overall orientation, especially in chapters on epistemology, ethnographic writing, the culture concept, political power, and art. The

* 創価大学，国立民族学博物館共同研究会特別招へい講師

Key Words: American anthropology, textbook analysis, change and continuity, postmodernism, evolutionism

キーワード：アメリカ人類学，教科書分析，変化と連続，ポストモダニズム，進化主義

old edition's evolutionary approach has been retained, however, and theoretical inconsistency is observed in the juxtaposition of the traditional "grand narratives" and the postmodern critiques that refute them. Also problematic is the virtual identification of American anthropology with the diverse anthropologies in the rest of the world. Comparison with other textbooks shows that they have the same problems and tendencies. The paper concludes by calling for a more systematic analysis of textbooks as windows to American anthropology as a foreign culture.

1 はじめに	4 本の構成の連続性
2 教科書を検討する意義	5 内容と記述の変化
3 Nanda and Warms 著 <i>Cultural anthropology</i> 選択の理由	6 結語

1 はじめに

本稿では、Serena Nanda and Richard L. Warms 著 *Cultural anthropology* (6th edition, 1998) と、その前身である Serena Nanda 著 *Cultural anthropology* (4th edition, 1991) の比較を通じて、アメリカの大学における文化人類学の教科書が、1990年代前半からどのように変化したかについて考察する。

もとよりアメリカは教科書大国である。執筆時の2000年7月現在、アメリカ国内で使われている文化人類学（以下単に「人類学」と呼ぶ）の教科書は、私が入手した限りでも20冊以上ある¹⁾。本来なら、それらを逐一調べた上で報告すべきだが、1冊400ページ（大判2段組が多い）を優に超える分量と、数年毎に改定される現実を考えると、独力ですべてを網羅するのは困難である。そこで、不完全を承知の上で前記の著作に焦点を絞り、一つの事例として検討したい。なお本稿でいう教科書とは、主に入門講座で使われる概説書（introductory textbook）のことである。

2 教科書を検討する意義

クロバー（A. L. Kroeber）の *Anthropology*（初版1923年，1948年に改定）に代

表されるように、かつて人類学の教科書を著したのは大家であった。そして、彼らの著作は学会のスタンダードとして君臨し、強い影響力を持った。しかし、今日のように専門化と細分化が進み、さらに大学教育が大衆化すると、教科書の執筆は二流の研究者の仕事と見なされ、学術的価値は殆どないと考えられるようになった。だが現実には、文化唯物論の提唱者であるハリス (Marvin Harris) や、優れたオセアニア研究者であったキージング (Roger M. Keesing) にも教科書を書いているので、これは必ずしも的を射た見解ではない。特に、教科書の記述は学会のコンセンサスを反映するので、その変化は学問的潮流の指標と理解できる。

3 Nanda and Warms 著 *Cultural anthropology* 選択の理由

Nanda and Warms の著作を選択した理由は、主に三つある。まず、ヴァージニア州リッチモンド市 (Richmond) にあるヴァージニア・コモンウェルス大学 (Virginia Commonwealth University) に、私は1989年から1993年まで4年間在職し、毎学期「文化人類学入門」の講座を担当した。本書はそのとき教科書として使ったので、内容は熟知しているつもりである。次に、この本の第4版はナンダ (Serena Nanda) の単著であったが、第6版では中堅のウォームズ (Richard L. Warms) を共著者として加え、記述に大幅な変化が見られた²⁾。その変化は、1980年代以降の人類学の動向をよく反映していると思われるので、二つの版の比較は学説史的に興味深く、また将来の教育のあり方を占う上でも有益である。最後に、本書の第1版が刊行されたのは1980年であるが、それ以降約20年にわたって版を重ねている³⁾。このことは、5年もしないうちに絶版になる教科書が少なくない中で、かなりの成功を収めたことを意味する。他の教科書と比べても、理論的に偏りがなく民族誌とのバランスも良いので⁴⁾、現代アメリカを代表する教科書の一つと考えて良いだろう。

4 本の構成の連続性

章立てを見ると、Nanda (第4版) は全17章、Nanda and Warms (第6版) は16章と学説史を解説した補遺から成るが、基本的な構成に変化はない⁵⁾。第6版の目次は末尾に「参考」として掲げてある。分野を問わず、アメリカの教科書は15章を少し超えたものが多い。これは、semester 制は講義が15週間、quarter 制は10週間あり、近年では semester 制を採用する大学が多いので、学習の便を考えたものであろう。

一般に、1970年代以降の人類学の焦点は、機能や構造から意味や象徴に変化したと言われる。後者にもっとも大きな影響を及ぼしたのはギアーツ (Clifford Geertz) であり、彼の解釈人類学は人類学の枠を越えて広く議論されている。アメリカの人類学を、ハリスに代表される唯物論 (materialism) とギアーツに代表される観念論 (idealism) に二分すると、現在では明らかに観念論が優勢である。しかし、教科書の世界では事情は異なり、唯物論の影響が強い。このことは、物 (物質) から心 (精神) へと進む章立てに、典型的に表されている。入手した教科書の多くは、(1) 文化の概念と人類学の方法、(2) 文化の諸相、(3) 文化の変化と人類学の応用、の3部門に分かれる (この表記は私個人のもので、他にも適当なものが考えられるだろう)。記述の大部分を占める第2部門の「文化の諸相」は、自然環境 (生態)・生業の説明に始まり、次に経済・家族と結婚・親族・ジェンダー・政治・法律などを論じ、最後に心理・宗教・芸術に触れるのが一般的である⁶⁾。この構成は、ハリスのように「下部構造」「構造」「上部構造」という言葉こそ使っていないが、唯物論的な文化観 (より一般的に言えば、生業形態の分類に基づく進化論的アプローチ) を採用したものと言って良い⁷⁾。

5 内容と記述の変化

Nanda and Warms を含めて、1990年代前半から起きた最大の変化は、恐らくインターネットの利用であろう。マイクロソフト社の Windows 95 が1995年に発表されてから、日本でもインターネットの使用は激増しているが、アメリカではこの新しい技術を大学教育に積極的に活用し始めた。具体的には、章末の参考文献と共に、それぞれの章で学習した項目と関連のあるウェブサイト (ホームページのアドレス) を掲載し、関心のある学生が最新の情報を得られるように配慮してある。また Internet Exercises と題して、ブラウザの検索機能を利用して学生自らが情報を収集し、特定の問題について調べるように指示したものもある。さらに、多くの出版社は独自のウェブサイトを開設し、パスワードを持った顧客 (学生) に対して、教科書のサマリーやサンプルテストなどを提供するサービスも始めた。そればかりでなく、一部の教科書 (例えば Ember and Ember 1999; Kottak 2000) には、付録として予め CD-ROM が付いていて、特定の項目に関する映像 (例えばトロブリアンド諸島の地図) や音声 (例えば民俗音楽) を引き出すことができる。そして、CD-ROM からインターネット上の関連サイトにアクセスすれば、より詳細な情報が得られるように工夫され

ている。異文化は印刷された文字だけでは伝えにくいので、マルチメディアを利用した教材は人類学にとって重宝である。日本の大学教育も、アメリカから学ぶことは多そうだ。

Nanda and Warms には、以前の版にはなかった大きな特徴が二つある。一つは、近年のグローバリゼーションを反映して、各章にこの問題と関連する話題を、枠入り (box) で取り上げたことである。幾つか例をあげると、葉草に関する民族誌的データがグローバル経済に持つ商業的価値、女子割礼をめぐる国際的人権論争、ハンバーガー用の牛肉消費が第三世界の生産地に与える影響、海を越え国境を越える親族の絆、グローバリゼーションの反発としてのナショナリズムの昂揚、エイズへの世界的関心などである。こうした話題は極めて現代的で、大変興味深い。もう一つの新しい特徴は、ジェンダーに関する独立した章を設けたことである。以前、ジェンダーは社会化、結婚と家族、近代化などとの関連で語られ、記述が分散していた。今回からは一箇所にまとめられ、付随現象としてではなく、単独で語る価値のある現象として取り上げられた。なお、グローバリゼーションとジェンダーについては、90年代初頭よりも大きく扱った教科書が増えた。

以下、Nanda (第4版) との比較で、Nanda and Warms (第6版) を章ごとに検討する。最初に各章の項目を掲げるので、本文の内容は大体理解できると思う。

(i) 第1章 人類学と人間の多様性 (Anthropology and human diversity)

- 1 人類学の分類 (文化人類学, 言語人類学, 考古学, 自然または生物人類学, 応用人類学)
- 2 人類学から学ぶもの: 人間の差異の理解 (エスノセントリズム, 人間の生物的多様性, 人種の文化的構築, 人種差別と人種主義, 人類学と文化相対主義, エミッタとエティックの文化アプローチ)
- 3 変化する世界の中の人類学

一般に人類学の教科書は、序論で文化的存在としての人間像を提示する。本書で目立つのは、文化を生物 (特に人種) との対比で捉えていることである。もちろん、この傾向は以前からの教科書にも認められたが、著者は「人種」と「知能指数」の関係を指摘した近年の科学的人種主義 (scientific racism) を批判し、その上で文化の重要性を説いている⁸⁾。ここには、1990年代に保守化したアメリカの姿を垣間見ることができる。著者自身は述べてないが、特に問題なのは、PC (Political Correctness) に反発した多数派の隠れた人種主義と、多文化主義 (multiculturalism) に潜む少数

派の逆差別的人種主義（例えばアフロセントリズム Afrocentrism）であろう。だが、こうした文脈で文化相対主義を説き、エスノセントリズムの危険性を指摘することは、文化の政治化につながる恐れがある（桑山 1999: 204-210）。またそれ以上に、人種主義に対抗する手段として文化を強調したアメリカ人類学の父ボアズ（Franz Boas）の時代に遡りしているようで、一種のむなしさを感じさせる。人間を決定するのは「遺伝か環境か」（nature or nurture）という問いに対して、「環境」つまり後天的に獲得される文化の重要性を訴えたボアズ学派は、アメリカ人類学のリベラルな伝統を体現していた。ボアズの没後半世紀以上も経て、再び彼らが声を大にして文化を説かなくてはならない現実に、奴隷制度を経験した唯一の近代国家アメリカの苦悩を見ることが出来る。なお、人種概念に含まれる恣意的要素を「文化的構築」と表現したのは、最近の人種・エスニシティ論を反映したものだろう。

「3 変化する世界の中の人類学」の項では、人類学と植民地主義との関係、文化の表象における力関係、先住民による異議の申し立て、ポストコロニアル時代における人類学の課題、などが手際よくまとめられている。こうした記述は、第4版には全くと言って良いほど見られなかったもので、人類学の「古典的時代」に教育を受けたナンダ（1973年に博士号取得）と、ポストモダニズムに影響されて「激動の時代」に育ったウォームズ（1987年に博士号取得）の世代差を図らずも示している⁹⁾。

(ii) 第2章 文化人類学の実践 (Doing cultural anthropology)

- 1 文化人類学の実践 2 民族誌とフィールドワーク（フィールドワークの実践）
- 3 フィールドワークと民族誌：歴史的考察（民族誌の新たな方向、フェミニズム人類学が民族誌に与えた影響）
- 4 現代民族誌の特殊な問題（自社会の研究、フィールドワークの倫理、民族誌と危険な状況のジレンマ、民族誌家の新たな役割）
- 5 通文化研究と民族誌的データの効用（通文化的サーベイ）

フィールドワークを通じた文化理解に、人類学の特徴があることを指摘した点は以前と変わらないし、今後も変わらないだろう。だが、クリフォード（James Clifford）とマーカス（George E. Marcus）が編集した『文化を書く』（原著1986年）の「ショック」から、15年近くの歳月が流れた今日、民族誌を客観的観察に基づく異文化の科学的記録として提示することは、教科書レベルでも不可能なようだ。このことは、「民族誌の新たな方向」の項に現れた用語を見れば、一目瞭然である——ポストモダニズ

ム、部分的真理、新植民地主義、多重音声、ナラティブ、表象、他者、対話主義、等々。フェミニズムに関する記述は、特筆に価するものはないが、人類学の男性中心主義を明確に指摘している。さらに、「自社会の研究」の項ではネイティブ (native) の人類学者の登場に触れ、描かれる者ばかりでなく、描く者の変化についても論じている。「民族誌家の新たな役割」の項では、この問題をさらに発展させて、かつては一方的に表象の対象であった非西欧の民族が、今日では西欧の民族誌を流用して、文化的アイデンティティやナショナリズムを構築している事実注意到を喚起している。最後に、「フィールドワークの倫理」の項には、アメリカ政府の対ゲリラ活動に加担した人類学者がいたことについて、反省が述べられている。

(iii) 第3章 文化の概念 (The idea of culture)

- 1 文化は人間が世界に適応する手段である
- 2 文化は人間が世界を組織する手段である
- 3 文化は人間が生活に意味を与える手段である
- 4 文化は統合システムである？
- 5 文化は規範と価値の共有システムである？
- 6 文化は常に変化している
- 7 文化の再考

文化は人類学の中心概念である。そのため、どの教科書にも必ず最初の方に、文化概念の詳細な説明がある。従来、Nanda (第4版) を含めて、それは次の6点に集約されていた。(1) 文化の獲得、(2) 文化の共有、(3) 理念的文化と現実的文化、(4) 文化の統合、(5) 文化の適応、(6) 文化の変化。Nanda and Warms (第6版) も、基本的にはこのパターンを踏襲している。しかし、第6版には幾つかの「コペルニクス的変化」が見られる。

まず、ベネディクト (Ruth F. Benedict) の『文化の型』(原著1934年) で謳われた文化の統合に関しては、「4 文化は統合システムである？」の最後の疑問符「？」が、すべてを物語っているだろう (原文は Culture is an integrated system—or is it?)。「全体」または「システム」としての文化という従来の「公理」(文化様式論や機能主義) が、教科書レベルで疑問視され始めたのである。実際、この項は次のように締め括ってある。「ポストモダニストは文化や社会を戦場と見なし、権力の掌握や文化を解釈する権利をめぐる、個人や集団が争う場と捉えている」(p. 49)。同様の記述は、「5 文化は規範と価値の共有システムである？」(原文は Culture is a shared system of norms and values—or is it?) の項にもある。第4版では、下位文化

の存在や個人の相違を指摘するに留まっていたが、第6版では規範や価値は「交渉され」(negotiated), 「争われる」(contested) ものだとしている。そして、こうした観点を前面に打ち出したのが、フェミニズム, 新マルクス主義, ポストモダニズムであると説明している。さらに、グローバリゼーション関係の粹入りエッセイには、コロンプスは英雄か侵略者か、という論争が紹介されている。

その他では、「3 文化は人間が生活に意味を与える手段である」の項が新たに設けられ、ギアーツの解釈人類学と「テキスト」としての文化の説明がある。また「6 文化は常に変化している」の項では、グローバリゼーションは世界を結びつける一方で、先進国による第三世界の支配を強化し、各地で「抵抗」が起きていることに注意を喚起している。そして、最後の項「7 文化の再考」では、人類学は科学か否か、を問うている。

(iv) 第4章 言語 (Language)

- 1 人間の言語の起源と発達 2 コミュニケーションと人間の言語 3 言語の獲得
- 4 言語の構造 (音韻論, 形態論, 統語論, 意味論: 語彙目録) 5 言語と文化 (サピアとウォーフの仮説, コミュニケーションの民族誌, 言語と方言: 黒人英語)
- 6 非言語コミュニケーション 7 言語の変化

言語に関する記述は、Nanda (第4版) と Nanda and Warms (第6版) で、本質的な変化は見られない。文化人類学と、言語学および自然人類学 (霊長類学を含む) の分化が進むにつれ、人間の言語に関する最新の研究を、教科書に反映させるのは難しくなったのだろう。言語学者ピンカー (Steven Pinker) の話題作『言語を生み出す本能』(原著1994年) に依拠して、言語本能の問題を以前より詳しく説明しているが、彼の言語人類学 (特にサピアとウォーフの仮説) の批判については、何も触れられてない。ピンカーによれば、言語決定論の証拠としてウォーフが掲げたホビ語やアパッチ語の例は滑稽であり、またイヌイットの言語には雪を表す言葉が何百もあるという人類学者の説は「大嘘」である (詳しくは前掲書の第3章「思考の言葉」を参照)。ピンカーの議論の正否はともかく、サピアとウォーフの仮説は言語人類学を教える際のポイントであり、この問題については人類文化の普遍性との関連で人類学者が検証した著作が既にあるので (例えば Brown 1991), そうした研究にも言及すべきであらう。

その他のトピックで関心を引いたものは二つある。一つは *genderlect* (*gender* と *-lect* の合成語) という概念を提唱したタネン (Deborah Tannen) のベストセラー *You just don't understand* (1990) (副題は *Women and men in conversation*) を大きく取り上げ、言語の使用におけるジェンダー差に注意を喚起したことである。これは現代人類学におけるジェンダーの重要性を反映したものと見えよう。もう一つは、近年 African American Vernacular English (AAVE) または Ebonics (「黒檀」を意味する *ebony* と *phonics* を合わせた言葉) と呼ばれるようになった「黒人英語」である。黒人英語が「不完全」で「劣っている」という社会一般の認識には言語学的な根拠がなく、白人の「標準英語」との地位的差は、両者を母語とする社会集団の力の差によるものだ、という説明がなされている¹⁰⁾。

(v) 第5章 文化の学習 (Learning culture)

1 人間発達の文化的構築 (ブラジル東部の母親と「救命ボート」の倫理) 2 文化とパーソナリティ 3 文化の伝達 4 思春期: 男性のイニシエーション 5 女性のイニシエーション 6 アメリカの思春期 7 学校教育と社会 8 アメリカの学校文化と社会的地位 (学校と少数派の地位)

本章は、アメリカで独自の発展を遂げた心理人類学 (文化とパーソナリティ) の解説である。ミード (Margaret Mead) の『サモアの思春期』(原著1928年) に代表される子育ての研究に始まり、ホワイティング夫妻 (John W. M. Whiting and Beatrice B. Whiting) による行動主義的な社会化の通文化研究 Six Culture Project へと発展したという説明は、どの教科書にもある標準的なもので第4版と変わらない。しかし第6版の焦点は、小部族のインフォーマルな育児法から、現代産業社会におけるフォーマルな学校教育へと移った。特に、文化化 (*enculturation*) の機関としての幼稚園／保育園 (*preschool*) が取り上げられ、日本、中国、アメリカの詳細な比較がある。この比較は、広範な読者を得た Joseph J. Tobin, David Y. H. Wu, and Dana H. Davidson 著 *Preschool in three cultures* (1989) に基づいている。ここで想起すべきは、ベネディクトの『菊と刀』以来、研究対象としての日本は、心理人類学の分野でもっとも頻りに語られてきたという事実である (桑山 1996)。小学校以上の教育については、アメリカの学級指導におけるジェンダーの問題や、少数民族を取り巻く環境と学業の関連などが述べられている。後者の研究のパイオニアとして、オグブ

(John Ogbu) が掲げられている。心理人類学と教育人類学の関係は必ずしも密接ではなかったが、学校教育の研究を通じて接近する可能性を感じさせる¹¹⁾。

(vi) 第6章 生計を立てる (Making a living)

1 環境と文化の多様性 2 環境区分と食物確保のシステム 3 環境適応 4 科学、技術、適応 5 主な生業の戦略 (狩猟採集, 牧畜, 根栽農耕, 穀物農耕) 6 産業社会および脱工業時代のグローバル経済で生計を立てる

この章は、前述の第2部門「文化の諸相」の「下部構造」に相当する。注6で述べたように、言語と心理に関する章は「上部構造」で説明する教科書が多いが、Nanda and Warms のように、第2部門の前に置くものもある。第4版と同じく、ここでの最大のポイントは、生業の5類型、つまり(1)狩猟採集、(2)牧畜、(3)根栽農耕、(4)穀物農耕、(5)工業(産業)の解説である。ここで言う「根栽農耕」と「穀物農耕」は、それぞれ horticulture (extensive cultivation) と agriculture (intensive cultivation) の訳語である。日本では、一般に栽培する作物を基準に両者を区別するが、アメリカでは栽培技術を基準に区別する場合が多い。Horticulture は鍬 (hoe), agriculture は犁 (plow) に象徴される。

第4版と比べて第6版が大きく変わったのは、最後の工業(産業)社会の部分に、グローバル経済の説明を付け加えたことである。Nanda and Warms は富や権力の不均衡に敏感で、経済のグローバリゼーションが地域間の貧富の差を拡大している現実に注意を促している。アメリカと日本におけるハンバーガーの消費が、安価な牛肉の生産地である中南米の生態系を破壊しつつあるという挿入のエッセイは、文字通り学生に food for thought を提供するだろう。放牧はさまざまな環境変化を伴うからだ。

(vii) 第7章 経済 (Economics)

1 経済行動 2 経済システム 3 生産と資源(土地の割り当て, 労働の組織, 生産資源と資本財の評価) 4 分配: 交換システム(互酬性, 再配分, 市場交換, 資本主義への適応と抵抗)

第7章から第12章までは、ハリスの言う「構造」に相当する。全般的に、第6版に

は第4版よりアメリカの民族誌的事例が多く、人類学の現代的意義を学生が理解しやすいように工夫されている。しかし経済に関する限り、内容そのものに大きな変化はない。旧版と同じく、個人の富の蓄積を中心とする近代西欧の経済観の限界を指摘した上で、主に前近代の非西欧社会における経済を説明している。具体的には、まず資源（特に土地の所有と使用）と労働を、前章で見た生業の5類型と結びつけて論じている。例えば、根栽農耕社会では、一般に土地は親族集団が所有し、土地耕作の権利は個々の世帯に属す、そして土地の開墾は男の仕事で、耕作は男女共同の仕事である、というように。

次に、交換の類型として、ポランニー（Karl Polanyi）の（1）互酬性、（2）再配分、（3）市場交換、の三つを掲げている。但しポランニーの理論ということは明記されていない。互酬性に関しては、サーリンズ（Marshal D. Sahlins）の3類型「一般的」「均衡的」「否定的」を紹介し、トロブリアンド諸島のクラを、均衡的互酬性の例として詳しく説明している¹²⁾。また、再配分についてはポトラッチを取り上げ、社会機能を重視した従来の解釈ではなく、文化的アイデンティティの印（marker）と見る最近の研究方向に触れている。

Nanda and Warms に限らず、暗黙の内に唯物論的なアプローチを取る教科書には¹³⁾、文化相対主義と社会進化論が「呉越同舟」という問題がある。この問題は本章にもっともよく現れている。まず、近代西欧の資本主義を一つの経済のあり方と捉え、非西欧の前近代社会の経済と対等に扱うのは相対主義である。しかし、経済システムの多様性を生業類型と結びつけ、それぞれの発展段階に一般的な傾向として論じることは、社会進化論である。その典型は、互酬性、再配分、市場を交換原理とする社会は、それぞれバンドと部族、首長制、工業（産業）社会に多いという見解であろう。後者はサーヴィス（Elman R. Service）の有名な進化類型である（第12章を参照）。また、環境や技術と社会組織の因果関係を示唆した一般化も少なくない。本書の最初の数章は、「科学的法則化」や「大理論」を否定するポストモダニズムに大幅に依存しているので、こうした記述は理論的一貫性に欠けると批判されても仕方あるまい。

(viii) 第8章 結婚、家族、家庭集団

(Marriage, family, and domestic groups)

- 1 結婚と家族の機能 2 結婚の規則（近親相姦のタブー、外婚、内婚、選択婚、レヴィ

レートとソロレート, 配偶者の数, 配偶者の選択, 結婚時の権利とモノの交換) 3 家族, 家庭集団, 住居の規則 (核家族と独立居住, 複合家族, 拡大家族)

率直に言って, もっとも代わり映えがしない章である。記述の基本的枠組みは構造機能主義であり, 結婚と家族が人間社会を維持するために果す役割 (function) を強調している。そのため, 特定の条件下での習慣や制度の適合性 (adaptation) を示すに留まっている。例えば, 結婚の機能の一つは男女の性的関係の規制にあり, 核家族は移動率の高い工業社会や狩猟採集社会に適合した形態である, といった具合である。日本の人類学の教科書もそうだが, 家族や親族の章は学生にとって難解な用語が多く, あたかも試験の穴埋め問題を準備するために書かれたような印象さえ与える。もう少し学生 (読者) の関心に沿った記述が望まれるだろう。その点, 現代アメリカ家族の変遷 (特に片親で女性が世帯主の家族の増加) を, Nanda and Warms が大きく取り上げたのは評価できる。なお, 本章の表題にある「家庭集団」(domestic group) とは世帯 (household) のことである¹⁴⁾。

(ix) 第9章 親族 (Kinship)

1 親族: 血縁と結婚を通じた関係 (出自の規則と出自集団の形成, 単系出自) 2 単系出自集団の類型 3 父系出自集団 (ヌア族: 父系社会) 4 母系出自集団 (ホビ族: 母系社会, 二重出自: ナイジェリアのヤコ族) 5 非単系親族システム 6 親族の分類 (親族分類の原理) 7 親族用語の類型 (ハワイ型, エスキモー型, イロクォイ型, オマハ型, クロウ型, スーダン型)

この章も基本的に変化はないが, 二つのことに注意したい。第一に, 人類学者はこれまで複雑な実生活の諸相 (特に葛藤 conflict) を見過ごして, 静的な親族像を提示してきた。著者はこうした傾向を批判し, アラブ父系社会の研究で知られるアブ=ルゴッド (Lila Abu-Lughod) のラディカルな見解を紹介している。アブ=ルゴッドによれば, 人類学者は実生活の「矛盾, 利害, 疑念, 口論」に目をつぶってきたため, 文化には「一貫性, 同質性, 非時間性」があるかのように描いてきた。この問題を克服するには, 「文化に反して書く」(writing against culture) 必要があるという (p. 185)¹⁵⁾。さらに著者は, 韓国父系社会における相続問題を民族誌的事例として大きく取り上げ, 規則づくめで静的な親族像を打破するためには, 家族のライフストーリー

の研究が有効であると述べている。

第二に注目すべきは、本章の扉写真（表題のページに掲載された写真）が、韓国の結婚式に参列した親族を映し出していることである。花嫁花婿は洋服を着ているが、その他の女性は殆どチョゴリとチマを着用している。人類学の教科書に「展示」された写真が、ステレオタイプとオリエンタリズムを増長することについては、別稿で述べた（桑山 1996）。ここでは、1980年代後半から90年代前半の教科書には、（1）韓国の記述や写真はほぼ皆無であり、（2）結婚や親族の章には着物姿の日本女性がよく登場していた、という点を指摘しておきたい。前者については、韓国からの移民が大都市を中心に増え、特に1992年ロサンゼルスで起きた暴動を契機に、アメリカ人の韓国に対する関心が高まったことと関連しているだろう。後者については、Nanda and Warms を含めて、日本の写真が全般的に少なくなっており、近年のアメリカの“Japan passing”（1980年代の Japan bashing をもじった表現）が、教科書の世界にも反映されたと考えることができる。どの民族の何が、何との関連で、何時どのように語られるか（あるいは語られないか）は、文化表象の大きな問題である。

(X) 第10章 ジェンダー (Gender)

1 ジェンダーの文化的構築 2 第三の性、第三のジェンダー 3 性行動の文化差（性行動とイデオロギー：通文化比較、セクシュアリティとジェンダーの文化的構築、スペインにおける男性性の構築、男らしさの証明：文化的普遍性か？） 4 ジェンダー役割と女性の地位 5 ジェンダー関係：複雑で可変（狩猟採集社会の女性：「男は狩人」への挑戦、女性と権力、トリングット族：非平等主義の狩猟採集社会における女性と権力、根栽農耕社会のジェンダー関係、経済発展と女性の地位、技術とジェンダー役割）

Nanda and Warms（第6版）は、ジェンダーに関する新たな章を設けた。基本的なメッセージは次の二つである。（1）ジェンダーは文化的に決定される。生物学的に決定されるものではない。（2）ゆえに、ジェンダーは文化的に可変（variable）で、歴史的に特殊（specific）である。著者は人類学におけるジェンダー研究の起源を、ミードの *Sex and temperament in three primitive societies*（1935）に求め、ミードの貢献は「男らしさ」と「女らしさ」の文化的可変性と、人間形成における環境の重要性を示したことにあるとする。全体的に、「ジェンダーの文化的構築」（以前は「構築」

construction ではなく「パターン化」patterning と表現していた)を強調しているの
 で、ヒトとしての人間には殆ど触れていない。そのため、生物学的要因を無視するこ
 との誤りを説き、ミードを含むボアズ学派を激しく批判して大論争を巻き起こしたフ
 リーマン(Derek Freeman)の『マーガレット・ミードとサモア』(原著1983年)に
 ついては、全く言及がない。性(生物)とジェンダー(文化)の区別は重要だが、二
 律背反的に捉えたと両者の関連を問えなくなる危険性がある(Moore 1994: 813)。

ジェンダーの歴史文化的構築を示す民族誌的事例は、ヨーロッパ中世の女性観(例
 えば、聖書に登場するイヴはアダムを性的に魅了し、道を誤らせたというキリスト教
 の解釈)を含め、Nanda(第4版)より数段充実している。ただ残念なのは、そうし
 た事例が新たなジェンダー理論から導かれたものではないということだ。例えば、自
 然/文化(nature/culture)、家内/公(domestic/public)、再生産/生産(reproduc-
 tion/production)などの二分法を否定し、親族研究そのものをジェンダーと絡めて
 見直すべきだという主張(Yanagisako and Collier 1987)は言及されているが、あま
 り効果的に利用されてない。第8章「結婚、家族、家庭集団」と第9章「親族」の記
 述に、殆ど新しいものが見られなかったのは、恐らくこうしたことと関連しているだ
 ろう。

以下、その他の問題を二つだけ述べる。まず、ジェンダーについて独立した章を設
 けた教科書が、1990年代前半にはさほど多くなかったのに、その後10年もしないうち
 に増えたという事実は、どのように解釈すべきだろうか¹⁶⁾。好意的に取れば、ジェ
 ンダーをより深く知りたいという学生または社会一般の要求に、人類学者が積極的
 に応えたということになるだろう。しかし、多文化主義と同様、ジェンダーをめぐって
 揺れる今日のアメリカ社会では、ジェンダーに言及することが「政治的に正しい」
 (Politically Correct)という判断もあったのではないか。こうした疑念を裏打ちする
 ように、第10章の記述の中には、以前は別の章にあったものを「寄せ集め」て、「化
 粧直し」した程度のものが多い。

次に今述べたことの結果として、ジェンダーを社会進化論の枠組みで語る傾向が見
 られる。第5項の「ジェンダー関係：複雑で可変」の構成を見れば分かるように、著
 者はジェンダー(特に女性の地位と力)を、進化論的意味合いの強い生業類型(狩猟
 採集、根栽農耕、近代産業など)と結びつけて、因果関係を探りながら論じている。
 その議論は、基本的にはフリードゥル(Ernestine Friedl)の見解——女性の地位は有
 益な資源を家庭外で分配する力と関連する——に依拠している。だから、単純な根栽
 農耕が犁などの大型農具を使う穀物農耕に発展すると、非力な女性は家庭内に閉じ込

められ地位が低下し、それは操作が複雑な機械の導入が進む近代農業社会においてさらに顕著になる、といった議論が展開される。Nanda and Warms は、植民地主義や資本主義など西欧のインパクトを考慮している点で、内発的要因を中心とする古典的社會進化論とは異なるが、新たな章や用語に隠された「昔ながらの」記述に注意する必要がある。第3章で著者は、文化の統合や共有について根本的な懐疑を表明しているのだから、同一の文化にもジェンダーに関する語り (gender discourse) は複数あり、それらは時として拮抗するという程度の示唆 (Moore 1994: 824-5) は欲しい¹⁷⁾。

(xi) 第11章 社会的地位と階層 (Social ranking and stratification)

- 1 平等主義社会 2 地位社会 3 成層社会 (力・富・威信, 階級, カースト) 4 人種, エスニシティ, 社会階層 (人種と社会階層: ブラジルとアメリカ) 5 社会階層の見方

この章と次の章の主題は政治組織である。最初に紹介されている「平等主義社会」「地位社会」「成層社会」という3類型は、明記されていないが当然フリード (Morton H. Fried) の理論であり、全体的な記述は第4版と殆ど変わらない。この類型が政治の進化論である事実を明示していないのは、一種の「隠蔽」であろう。第3項「成層社会」では威信 (prestige) の問題を取り上げ、経済的階級を重視したマルクス (Karl Marx) に対して、威信や地位の象徴的側面を重視したウェーバー (Max Weber) について簡単な記述がある。ただ、ウェーバーへの言及は全章を通じて一度限りで (この点は他の教科書も同様である)、アメリカにおける人類学と社会学の分離を象徴的に表している¹⁸⁾。インドのカーストの説明が長いのは、ナンダがインド系であることも関係しているが、それ以上にカーストが西欧人の関心を強く引くからであろう。但しカースト研究の古典 Louis Dumont 著 *Homo hierarchicus* (全面改訂版 1980年) の紹介はない。概してアメリカ人は万人の平等を信奉し、自社会における階級存在を否定しがちであるという点で、カースト制度を発達させたインド人とは対照的であるが、著者は予想外に厳しいアメリカの階級差を指摘し、カースト問題は決して他山の石ではないと述べている。こうした説明は、異文化理解に必要な馴化 (familiarization 他者の自己化) と異化 (defamiliarization 自己の他者化) を、巧みに実践したものと言えよう。

旧版との最大の違いは、「4人種, エスニシティ, 社会階層」の項を新たに設けた

ことである。これは、人種やエスニシティが1990年代のアメリカで社会問題化し、同時に貧富の差も拡大したことの反映と思われる。興味深いのは、アメリカのように明らかな人種問題がなくても、日本の部落民 (the Burakumin) のように、「社会学的人種」(sociological race) あるいは「不可視の人種」(invisible race) の問題もある、と解説していることである。著者によれば、部落民の外見は大多数の日本人と変わらないのに、彼らは形質的にも道徳的にも「先天的に」異なると考えられている。つまり、人種というカテゴリーの構築に、目に見える形質的な差異は必ずしも必要ではない、というのが著者の見解である。この見解は一般に支持されており、他の数点の教科書も日本の部落問題を取り上げて、社会的構築物としての人種を論じている (Bates and Franklin 1999; Ember and Ember 1999; Kottak 2000; Scupin 2000)。

(xii) 第12章 権力と規制 (Power and control)

1 人間行動の規制 (政治組織, 法律) 2 政治組織の種類と社会規制 (バンド社会, 部族社会, 首長制, 国家社会) 3 エスニシティ: 現代世界における強い力 (エスニシティと国民国家)

Nanda (第4版) では、本章の題目は「政治制度と社会規制」(Political systems and social control) であった。最初の「政治制度」を「権力」(power) に改め、それを中心概念として扱っているところに、フーコー (Michel Foucault) 経由のポストモダニズムが、今日の人種学的思考に与えた影響の大きさを感じさせる。と同時に、サーヴィスの進化類型「バンド」「部族」「首長制」「国家」という「大きな物語」(grand narrative) の解説に、本章の半分以上のスペースを費やしているところに、奇妙な抱き合わせを感じさせる。

だが、元来サーヴィスの理論にはなかった国民国家を、政治組織の第4類型「国家」に加え、文化、エスニシティ、ナショナリズムの関連を論じた部分 (pp. 263-271) は、Nanda and Warms (第6版) でもっとも魅力的な記述の一つである。主な論点を列挙すると、以下の通りである。(1) 国家の最大の特徴は、政府による権力の独占である。政府は国内の対立を力で抑制する。(2) ネーションは自然発生的なものではなく、歴史文化的な構築物である。(3) ネーション構築の過程で、時空間の意味付けが行なわれる。その結果、「伝統」「過去」「歴史」「社会的記憶」が創造される。(4) エスニック集団は、独自の文化を共有すると認識する人々から成る。この認識

は必ずしも客観的なものではなく、置かれた状況により変化する。(5) エスニック・マーカーには、言語、宗教、衣服、食物などがあり、自他の境界線 (boundary) の形成に利用される。(6) 本質論的アプローチは、植民地主義など特定の歴史的条件下でエスニシティが登場し、持続し、変化する事実を見逃してしまう。(7) エスニック紛争の原因は、往々にして政治経済的なものである。(8) 政府はナショナル・アイデンティティの形成に、多数派を含む特定のエスニック集団の特徴を選択的に利用する。(9) ある集団の支配的文化の構築に、教育や法律の支配が果たす役割は大きい。(10) エスニシティやネーションの形成は闘争の結果であり、それは抵抗や人権侵害を必然的に伴う。以上の見解が、原初主義 (primordialism) と対比される操作主義 (instrumentalism) または近代主義 (modernist approach) に依拠しているのは明らかであろう。

(xiii) 第13章 宗教 (Religion)

1 宗教の機能 (秩序と意味の模索, 不安の解消と統制の強化, 社会秩序の強化および修復) 2 神話とシンボリズム 3 霊の世界と聖なる力 4 宗教儀礼 (通過儀礼, 強化儀礼, 超自然界への呼びかけ) 5 妖術と邪術 (妖術と邪術とは何か, 妖術や邪術の責め, 現代の魔女, 魔術, 新興教徒) 6 宗教の実践者 (シャーマン, 聖職者) 7 宗教と変化 (宗教と抵抗, 宗教的土着主義と復興, ネイティブ・アメリカンの宗教的变化)

二つの大きな事項が第4版から削除された。一つはタイラー (Edward B. Tylor) のアニミズム論である。また、そこから派生したマレット (Robert R. Marett) のアニマティズム論も姿を消した。もう一つはウォレス (Anthony F. C. Wallace) の宗教進化論である。ウォレスは *Religion* (1966) の中で、宗教を「個人的」(individualistic) 「シャーマン的」(shamanistic) 「共同体的」(communal) 「聖職者的」(ecclesiastic) の四つに分類し、進化論的な社会類型と対応させながら論じた。この分類は日本では殆ど知られてないが、アメリカではハリスをはじめとして、非常に多くの教科書で紹介されている。第6版にタイラー、マレット、ウォレスの説明がないのは、宗教の起源や進化 (発達) を問う試みは破綻した、というメッセージかもしれない¹⁹⁾。新たに加わった事項としては、ネイティブ・アメリカンのゴーストダンスやペヨーテ (Peyote religion または Native American Church) があり、全体的にアメリ

カの学生に親しみのある現象を取り上げている。

本章には不備な点も少なくない。まず、冒頭で宗教の機能を問い、その答を社会秩序の維持や強化に求めるなら、やはりデュルケムの『宗教生活の原初的形態』にある定義——宗教とは「聖なるものに関する信条や習慣の統一体系」であり、「それに帰依する者すべてを教会という単一の道徳的共同体に連帯させるもの」——に触れてほしい。この点は他の教科書も同じである。注12でモースの交換論に注意を促したが、アメリカの文化人類学者は、概してデュルケムの知的遺産に対する意識が希薄なように思う。その結果、彼に影響されて発達したイギリス社会人類学の成果（例えばエヴァンズ＝プリチャード E. E. Evans-Pritchard の妖術研究）を、十分活用しているとは言いがたい。次に、Nanda and Warms には、以前にもましてレヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss) の構造主義や、イギリスのリーチ (Edmund Leach)、ターナー (Victor Turner)、ダグラス (Mary Douglas) らの象徴的アプローチについて解説が少ない。また不思議なことに、ウェーバーの意味論を発展させたギアーツの解釈学的アプローチにも全く言及がない。現代人類学の宗教および神話の研究は、こうした面々を除いて語ることは出来ないのだから、これは重大な欠点と言うべきだろう²⁰。対照的に、宗教と生態の関係を論じたラパポート (Roy A. Rappaport) の *Pigs for the ancestors* (1968) は大きく取り上げられており、この事実は Nanda and Warms に「隠蔽」された唯物論および進化論的枠組みを示している。

(xiv) 第14章 芸術：文化的アイデンティティの表現 (The arts: Expressing cultural identities)

1 人類学的な芸術観 (社会の中の芸術家、芸術のスタイル) 2 芸術の機能 (儀礼と芸術：環境の支配、芸術と文化的テーマの展示、芸術の統合機能、深い遊び、アメリカンフットボールの意味、バリの闘鶏) 3 芸術と文化的アイデンティティ (芸術・権力・歴史の創造) 4 芸術：他者の表象 (ヨーロッパ芸術に見るオリエンタリズム：中東の描写、ヨーロッパ人の表象：ラテンアメリカ征服のパフォーマンス、芸術を媒介とする文化的アイデンティティのマーケティング)

本章はもっとも大幅に書き換えられた章の一つである。第4版の芸術の記述は、基本的に相対主義と機能主義に基づく静的 (static) なものであった。相対主義は、すべての民族は生活経験の表現としての「芸術」を持ち、そこに高低はないという立場

である。そして機能主義は、このように理解された芸術が、社会全体の維持や統合に果たす役割を問うものである。だから、民話の語りは伝統的価値を後世に伝え、社会的緊張を解きほぐし、社会的不満を解消する役割を持ち、社会統合に寄与するといった主張がなされた。第6版はこうした立場を継承しつつも、近代の植民地支配を含めたグローバルな文脈に芸術を置き、より動的な(dynamic)観点から考察している。また本文の記述には、第4版にはあまり見られなかった「表象」(representation)という言葉が頻繁に使われているが、これは1980年代の「表象の危機」に関する議論や、その後の博物館におけるモノの「展示」(display)の問題化を反映したものであろう。

本章の後半部は、サイド(Edward W. Said)の『オリエンタリズム』(原著1978年)以降の代表的な論調に従っている。例えば、「3 芸術と文化的アイデンティティ」には、民族の歴史や記憶の再構築に芸術が用いられること、また支配者の地位を正当化するためにも芸術は利用されること、などが書かれている。続く「4 芸術：他者の表象」では、(1) 芸術が差異に関する文化的イデオロギーとして働き、「我々」と「彼ら」という二項対立の世界観を形成する、(2) 他者像は他者の現実より自己の関心を反映する、(3) オリエントの女性を描いた近代西欧美術には、支配者の性的欲望が見え隠れする、(4) 西欧の支配に対抗するカウンター・ナラティブ(counter narrative)を劇化・上演することにより、被植民者は抵抗を試みる、(5) グローバリゼーションに伴う国際観光は、自他共に「伝統」芸術に対する関心を深め、民族の文化的アイデンティティを維持／生成する場を提供する、と述べられている。

(xv) 第15章 文化変化 (Cultural change)

- 1 ヨーロッパ世界の拡大(拡大の動機と手段)
- 2 植民地主義の時代(アメリカ大陸の植民地化, 19世紀の植民地化, 植民地主義の採算, 植民地主義と人類学)
- 3 独立と開発(開発, 多国籍企業, 都市化, 人口爆発, 不安定)

本章にも大幅な変化が見られる。Nanda(第4版)の説明は、1950年代に関心を呼んだ文化変容(acculturation)に始まり、主に非西欧社会の近代化、開発／発展、都市化、世界市場への参入などの現象を中心としていた。そして観光産業の発達も、こうした一連の変化の産物として取り上げられた。しかし、力点は西欧の観光客がホスト社会にもたらす悪影響にあり、「生成の語り」に対する「消滅の語り」を特徴としていた。Nanda and Warms(第6版)も、今日の第三世界が直面する同様の問題を

取り上げているが、視点がよりグローバルになり、それらを西欧自身の問題として捉えている。例えば、発展途上国に対して人口抑制を訴えると同時に、先進国が消費を抑える努力をしなければ、地球の資源は枯渇してしまう、というように。

もっとも印象的な変化は、本章の約半分のスペースが、近代西欧の世界進出と植民地主義の記述にあてられていることである。まず Nanda and Warms は、16世紀以降のヨーロッパ世界の拡大が、現地人の略奪や強制労働、東インド会社に代表される株式会社 (joint stock company) の設立、病原菌の蔓延などによるものであったことを指摘している。この指摘には、ポリティカル・エコノミー学派のウルフ (Eric R. Wolf) やミンツ (Sidney Mintz) らの知見が生かされている。また植民地主義との関連では、19世紀の社会進化論が「文明」による「未開」の侵略を正当化したこと、人類学者は本国から派遣された官僚や軍人とは一線を画しつつも、結果として植民地支配に加担したこと、などが書かれている。Nanda and Warms 以外にも、植民地主義を詳しく記述する教科書が最近増えているが、この傾向はグローバリゼーションの記述とあいまって、人類学の伝統的なイメージ——他の世界から隔絶された部族社会の研究——を変えるであろう。

(xvi) 第16章 人類学の効用 (The uses of anthropology)

1 人類学と公共政策 2 麻薬の使用と悪用 3 医療人類学：応用人類学の成長分野 (人類学とエイズ) 4 代弁者としての人類学者 (Cultural Survival, 法廷の証人としての人類学者, 計画的変化と開発人類学, 異文化間コミュニケーション：国際ビジネスにおける人類学の使用, 人類学の使用にまつわる問題, キャリアとしての人類学の実践)

本章は応用人類学に関するものなので、時代と共に扱うテーマも変化する。Nanda and Warms (第6版) に取り上げられた新たな主要テーマは、(1) エイズ、(2) 先住民の権利、(3) 異文化間コミュニケーション、の三つである。エイズについては、医療人類学がもっとも貢献できる分野として紹介されている。先住民の権利との関連では、メイベリールイス (David H. P. Maybury-Lewis) を中心とする Cultural Survival (1972年ハーヴァード大学に設立) の説明がある。この問題は、1992年に開催された国際先住民会議や、アメリカ人類学会 (American Anthropological Association) の人権宣言に後押しされて、今後さらに大きく取り上げられるだろう。異文化間コミュ

ニケーションの説明は、ホール夫妻 (Edward T. Hall and Mildred R. Hall) の *Hidden differences: Doing business with the Japanese* (1987) に依拠して、人類学が国際ビジネスに役立つことを示している。Nanda and Warms 以外にも、この分野に言及した教科書は多いが、その際スーツ姿の西洋のビジネスマンが、東洋のビジネスマンと商談している写真を掲載することが、ほぼ慣例となっている。なぜ大体はメガネをかけた東洋人でなければいけないのか、またなぜビジネス・ウーマンは登場しないのか、といった疑問を突き詰めて考えると、異文化理解を目的とするはずの人類学の教科書が、実はオリエンタリズムを再生産している可能性に気付く。この点については、拙稿 (桑山 1996; 1998) を参照されたい。

(xvii) 補遺 人類学理論の案内 (A brief guide to anthropological theory)

第4版では「第2章 文化人類学の理論」に学説史が含まれていたが、第6版では学説史を巻末に移して、より詳細に解説している。この体裁はハリスの教科書 (Harris 1997; Harris and Johnson 2000) と同じである。ただ、ハリスは文化唯物論の立場から書いているのに対して、Nanda and Warms の教科書はアメリカのどの人類学のコースにも見られる標準的なものである。以下、補遺に掲げられた13の項目 (学派) と、それぞれに登場する学者名を原語で列挙する。

(1) 19世紀の進化論 (Herbert Spencer, Edward B. Tylor, Lewis H. Morgan, Karl Marx, Friedrich Engels, Sigmund Freud)。(2) 初期の社会学 (Emile Durkheim, Marcel Mauss, Robert Hertz, Max Weber)。(3) アメリカの歴史個別主義 (Franz Boas, A. L. Kroeber, Robert Lowie, Edward Sapir, Ruth Benedict, Paul Radin, Ashley Montague)。(4) 機能主義 (A. R. Radcliffe-Brown, Bronislaw Malinowski, E. E. Evans-Pritchard, Meyer Fortes, Audrey Richards, Raymond Firth)。(5) 文化とパーソナリティ (Ruth Benedict, Margaret Mead, Abram Kardiner, Cora DuBois)。(6) 文化生態学と新進化論 (Julian Steward, Leslie White, George P. Murdock)。(7) 生態学的唯物論：機能主義，進化論，マルクス主義 (Morton Fried, Marshal Sahlins, Elman Service, Marvin Harris, Claude Meillassoux, Maurice Godelier)。(8) 構造主義 (Claude Lévi-Strauss)。(9) エスノサイエンスと認識人類学 (Harold Conklin, Stephen Tyler, James Spradley)。(10) 社会生物学 (Lionel Tiger, Robin Fox, E. O. Wilson, Jerome Barkow)。(11) 人類学とジェンダー (Michelle Z. Rosaldo, Louise Lamphere, Sherry Ortner, Micaela di Leonardo)。(12) 象徴人類学

と解釈人類学 (Clifford Geertz, Mary Douglas, Victor Turner)。(13) ポストモダニズム (Michel Foucault, Jacques Derrida, Renato Rosaldo, Vincent Crapanzano, Gananath Obeyesekere)²¹⁾。

上のリストを見て、すぐ気付くことがある。それは、マルクス、エンゲルス、ウェーバー、フロイトなどの巨人を除いて、掲載された人物はすべて英米仏の(機関で活躍する)学者だということである。しかし、「人類学理論の案内」と名乗る以上、英米仏以外のヨーロッパ諸国や、日本を含む非西欧諸国の知的伝統も、多少は紹介すべきだろう。一般化はできないが、アメリカを中心とする僅かな国の知的営みを、無意識の内に全世界のそれと同一視するところに、アメリカの人類学者の「学問的植民地主義」(scientific colonialism)が反映されていると私は思う。この点については、拙稿「現地の人類学者」の中で、「人類学の世界システム」として指摘した通りである(桑山 1997)。

6 結 語

最後に二つのことを述べたい。まず、第4版は人類学の「古典的時代」に育ったナンダの単著であったが、第6版は「激動の時代」を経験したウォームズとの共著となり、それまでには見られなかった新たな観点が導入された。実際、第6版を手にしたとき、私にはそれがかつて自分が使っていた教科書と同じものであるとは思えなかった。しかし、二つの版をよく比較検討してみると、変化の多くは文化の捉え方や「表象の危機」を中心にしていることが分かった。このことは、1980年代以降のアメリカ人類学の流れを、象徴的に表しているように思われる。というのも、オリエンタリズム批判やポストモダニズムは、それまで不問に付されていた多くの人類学的営みや前提を、根本的に再考するように迫ったが、個々のテーマに関して具体的な指針を与えるものではなかったからだ。その結果、例えば文化概念(第3章)の記述には「コペルニクス的变化」が起きたのに、親族(第9章)の説明は「旧態依然」としているといったアンバランスが見られる。換言すれば、文化についての研究は大幅に進んだが、文化の諸相そのものの研究は、あまり進んでないということである。また繰り返し指摘したように、Nanda and Warm's は、法則化や「大きな物語」を拒否するポストモダニズムの観点を大幅に取り入れる一方で、社会進化論の枠組みを利用して本そのものを構成し、進化の諸理論を詳細に説明するといった矛盾も見られる。この意味で、本書はアメリカ人類学の「移行期」の産物であり、内部のさまざまな葛藤を体現した

ものと言えよう。

もっとも「移行期」という言葉で、私はポストモダニズムの勝利を宣言するものではない。1995年4月から1996年9月まで、アメリカ人類学会の機関紙 *Anthropology newsletter* (現在は *Anthropology news* に改称) が組んだ特集「人類学における科学」(Science in anthropology) に掲載された約60の記事を見る限り、ポストモダニズムの全面的な勝利は有り得ない。だが、支持するにせよしないにせよ、この知的地殻変動に触発されたさまざまな動きの影響、特に近年の人類学に特徴的な内省性 (reflexivity) は、今後も長く続くであろう。

なお本稿では十分考察できなかつたが、ポストモダニズムの観点だけで人類学の教科書は書けるのか、またウォレスの宗教類型のように、学会では事実上放棄された進化論が、多くの教科書で語り継がれるのはなぜか、といった問題は熟考に値する。現時点で前者の問いに答えることは難しいが、後者の問いについては、純粹に学問的な理由の他に、アメリカの教科書産業のあり方や、教科書執筆者の力量なども考慮する必要があるように思う²²。教科書の分析を通して、異文化としてのアメリカ人類学に接近し、アメリカ的な「知の構造」を明らかにするのも有意義なのではないか。

第二に、補遺「人類学理論の案内」との関連で、どうしても見逃せないことがある。それは、同じ英語圏でも機能主義と象徴人類学を除いて、20世紀のイギリス人類学はほぼ無視されているという事実である。信じ難いことだが、ファース (Raymond Firth), フォーテス (Meyer Fortes), グラックマン (Max Gluckman), リーチ (Edmund Leach), ニーダム (Rodney Needham) といった一時代を築いた巨匠でさえ、巻末の長大な参考文献に名前はない。確かに、親族研究を中心とするイギリス社会人類学の伝統は、今日のアメリカ文化人類学にあまり魅力のあるものではないだろう²³。しかし、最近オックスフォード・ブルックス大学 (Oxford Brookes University) のヘンドリー (Joy Hendry) が著した教科書 *An introduction to social anthropology* (1999) を読むと、近年のイギリス人類学は、歴史、植民地主義、グローバルイゼーション、ジェンダーといった現代的問題を積極的に取り上げ、かなり先端的な研究をしている。アメリカの人類学者は、自分たち以外の世界の学問にももう少し目配りをして、人類の豊かな知的遺産と多様性を、教科書レベルから反映させるべきだろう。

以上、本論はあくまで一つの事例を取り上げたにすぎず、試論の域を出るものではない。ただ私を見る限り、Nanda (第4版) から Nanda and Warms (第6版) への変化の多くは、他の教科書 (特に1990年代以降に初版が出たもの) にも当てはまる。

それをより詳しく検討し、かつアメリカの文化人類学の教科書の全体像を提示するためには、各々の理論や地域の専門家を構成員とする共同研究が必要とされるだろう。共同で研究すれば、本論では触れなかった二つの重要な問題——（１）ある理論を説明する際に、どのような民族誌が用いられているか、（２）ある国や民族はどのように描かれているか——を検討する余裕も出るだろう²⁴。そして、成果をまず日本語で発表すれば、日本の人類学の教育に役立つだろうし、一步踏み込んで英語で発表すれば、アメリカの人類学者にプロフェッショナルなレベルで「内省」を迫ることもできる。今後の課題として以上のような提案をし、結びとしたい。

謝 辞

岸上伸啓氏（国立民族学博物館）は初稿に目を通してくださり、本稿の出版を薦めてくださった。また査読者からは貴重なコメントをいただいた。この場を借りて深く感謝の意を表したい。

参 考

Serena Nanda and Richard L. Warms 著 *Cultural anthropology* (6th edition) 目次

Preface	xxi
Chapter 1	Anthropology and human diversity1
Chapter 2	Doing cultural anthropology18
Chapter 3	The idea of culture38
Chapter 4	Language59
Chapter 5	Learning culture86
Chapter 6	Making a living106
Chapter 7	Economics131
Chapter 8	Marriage, family, and domestic groups157
Chapter 9	Kinship180
Chapter 10	Gender201
Chapter 11	Social ranking and stratification223
Chapter 12	Power and control246
Chapter 13	Religion274
Chapter 14	The arts: Expressing cultural identities301
Chapter 15	Cultural change321
Chapter 16	The uses of anthropology349
Appendix	A brief guide to anthropological theory371
Glossary379
References389
Index413

注

- 1) 著者のアルファベット順に、以下の21冊である。(1) Richard A. Barrett, *Culture and conduct: An excursion in anthropology* (2nd ed.), Belmont, California: Wadsworth Publishing, 1991. (2) Daniel G. Bates and Elliot M. Fratkin, *Cultural anthropology* (2nd ed.), Boston: Allyn and Bacon, 1999. (3) Paul Bohannon, *We, the alien: An introduction to cultural anthropology*, Prospect Heights, Illinois: Waveland Press, 1992. (4) Richley H. Crapo, *Cultural anthropology: Understanding ourselves and others* (4rd ed.), Guilford, Connecticut: Brown & Benchmark Publishers, 1996. (5) Carol R. Ember and Melvin Ember, *Cultural anthropology* (9th ed.), New Jersey: Prentice Hall, 1999. (6) Gary Ferraro, *Cultural anthropology: An applied perspective* (3rd ed.), Belmont, California: Wadsworth Publishing, 1998. (7) Marvin Harris, *Culture, people, nature: An introduction to general anthropology* (7th ed.), New York: Longman, 1997. (8) Marvin Harris and Orna Johnson, *Cultural anthropology* (5th ed.), Boston: Allyn and Bacon, 2000. (9) William Haviland, *Cultural anthropology* (9th ed.), Fort Worth, Texas: Harcourt Brace College Publishers, 1999. (10) Roger M. Keesing and Andrew J. Strathern, *Cultural anthropology: A contemporary perspective* (3rd ed.), Fort Worth, Texas: Harcourt Brace College Publishers, 1998. (11) Conrad P. Kottak, *Anthropology: The exploration of human diversity* (7th ed.), New York: McGraw-Hill, 1997. (12) Conrad P. Kottak, *Cultural anthropology* (8th ed.), New York: McGraw-Hill, 2000. (13) Serena Nanda and Richard L. Warms, *Cultural anthropology* (6th ed.), Belmont, California: Wadsworth Publishing, 1998. (14) James Peoples and Garrick Bailey, *Humanity: An introduction to cultural anthropology* (5th ed.), Belmont, California: Wadsworth Publishing, 2000. (15) Richard H. Robbins, *Cultural anthropology: A problem-based approach* (2nd ed.), Itasca, Illinois: F. E. Peacock Publishers, 1997. (16) Abraham Rosman and Paula G. Rubel, *The tapestry of culture: An introduction to cultural anthropology* (6th ed.), New York: McGraw-Hill, 1998. (17) Emily A. Schultz and Robert H. Lavenda, *Cultural anthropology: A perspective on the human condition* (4th ed.), Mountain View, California: Mayfield Publishing, 1998. (18) Raymond Scupin, *Cultural anthropology: A global perspective* (4th ed.), New Jersey: Prentice-Hall, 2000. (19) Raymond Scupin and Christopher R. DeCorse, *Anthropology: A global perspective* (3rd ed.), New Jersey: Prentice Hall, 1998. (20) Ernest L. Schusky and T. Patrick Culbert, *Introducing culture* (4th ed.), New Jersey: Prentice Hall, 1987. (21) Sheldon Smith and Philip D. Young, *Cultural anthropology: Understanding a world in transition*, Boston: Allyn and Bacon, 1998. インターネット書店の Amazon.com によると、2000年3月下旬の時点で、これらの書籍はすべて2週間(多くは24時間または数日)以内に発送可能である。値段は非常に高く、1冊平均55ドルから70ドルである。1990年代前半には、せいぜい40ドル程度であった。なお、各教科書のシェアについて、アメリカ人類学会(American Anthropological Association)に直接尋ねてみたが、売上は企業秘密に属するらしく、そうしたデータはないとのことであった(*Anthropology news*の編集者 Susan Skomal 女史との私信, 2000年5月9日)。
- 2) 私がヴァージニア・コモンウェルス大学で使ったのは、第3版(1987年刊行)と第4版である。第4版には、第3版にあった人類進化の説明(第2章“The biocultural nature of human adaptation”)が削除された以外、実質的な記述の変化は見られない。だから、第4版に関する私のコメントは、第3版にも基本的に当てはまる。なお、第5版は入手していない。
- 3) 改定が頻繁に行なわれるのは、学問的考慮からではなく、むしろ商業的理由による。アメリカの大学では、教科書の古本市場が発達していて、非常に多くの学生が学期の終了後に不要な教科書売り、そのお金で新学期の教科書を買う。そのため、本が出版されて数年もしないうちに、売上は激減してしまう。これを防ぐため、出版社は必ずしも必要でない改定を、数年毎に迫られるのである。
- 4) 数多い教科書の執筆者の中で、研究者としてもっとも尊敬されているのはハリスであろう。しかし、彼の提唱する文化唯物論の立場から書かれた *Culture, people, nature* (7th edition,

1997)には、宿敵のギアーツに全く触れてない点で「偏り」がある。なお、同書の簡約版でジョンソン (Orna Johnson) との共著となった *Cultural anthropology* (5th edition, 2000) には、ギアーツの文化理論が批判的に紹介されている。

- 5) 第4版では人類学の理論を第2章で説明していたが、第6版では補遺に回した。また第4版の第11章「非親族連合」(Nonkin-based forms of association) には、年齢、性、エスニシティを組織原理とした集団の説明があったが、第6版ではそれぞれ別の章に組み込まれ、「非親族連合」は姿を消した。但し性に関しては、ジェンダーとして新たに1章を設け、説明を大幅に補足した。結果的に、第6版は補遺を含めると、第4版と同じ全17章である。
- 6) 各教科書とも、言語の位置付けには苦勞しているようだが、主に次の三つのパターンが考えられる。(1) 第1部門「文化の概念と人類学の方法」に含める、(2) 第2部門「文化の諸相」の最初で論じる、(3) 第2部門「文化の諸相」を構成する「上部構造」に含める。心理(文化の学習、パーソナリティなど)は、Nanda and Warms のように、第1部門の最後に持ってくる場合もある。
- 7) 但し、イギリスで発達した機能主義の影響も十分考えられる。機能主義的民族誌またはモノグラフの記述は、生態、経済、親族、政治組織、宗教の順に進むのが特徴である。実際、1980年代の「実験的モーメント」が広く認識されるまでは、これが人類学における規範であった (Marcus and Fischer 1986: 28, 41)。だが、なぜ機能主義者が唯物論的な構成を好んだのか、また彼らはそのことに気付いていたのかは不明である。可能性として考えられるのは、この章立てがフィールドワークの手順そのものであったということだ。マリノフスキー (Bronislaw Malinowski) は『西太平洋の遠洋航海者』(原著 1922年)の序章で、人類学的調査は「部族の組織」(人間にたとえれば「骨格」)から「実生活の不可量部分」(「肉と血」)へ、そして「原住民の考え方」(native's point of view「心」)へと進むのが理想だと述べている。つまり、「可視」から「不可視」という順序である。機能主義者が唯物論とは無関係であったとしても、結果論的に、これが「物」から「心」へと進む章立て——民族誌であれ教科書であれ——に発展したことは考えられる。

因みに、機能主義の影響がアメリカに浸透する以前に書かれたクローバーの *Anthropology* (1923) の構成は、今日の教科書とは全く違う。参考までに目次を以下に掲げる。第1章「人類学の領域と性質」、第2章「化石の人間」、第3章「現存の人類」、第4章「人種の問題」、第5章「言語」、第6章「人類文明の起源」、第7章「遺伝、気候、文明」、第8章「伝播」、第9章「相似」、第10章「アーチと週」、第11章「アルファベットの普及」、第12章「原始宗教の発展」、第13章「原アメリカの文明史」、第14章「文明の発展：旧世界の先史と考古学」、第15章「文明の発展：旧世界の有史と民族学」。

また、*Anthropology* は1948年に大幅に改定され、以下のように変化した。第1章「人類学とは何か」、第2章「自然界における人間の位置」、第3章「化石の人間」、第4章「現存の人類」、第5章「人種的差異の問題」、第6章「言語」、第7章「文化の性質」、第8章「パターン」、第9章「文化のプロセス」、第10章「文化の変化」、第11章「発明の歴史：要因の相互作用」、第12章「文化の発展と普及」、第13章「アルファベットの話」、第14章「分布」、第15章「文化の心理」、第16章「人類文明の起源」、第17章「旧世界の後期先史と民族学」、第18章「アメリカの先史と民族学」、第19章「回想と展望」。初版と改訂版の主な相違は、文化概念の記述の詳細にあるが、それは1923年から1948年までの四半世紀に、文化の理論がアメリカで大幅に発展したことを物語っている。

- 8) Nanda and Warms が批判したのは、ハーヴァード大学の心理学者で、知能指数の研究で知られるハーンスタイン (Richard J. Herrnstein) が、政治学者のミュレイ (Charles A. Murray) と著したベストセラー *The bell curve: Intelligence and class structure in American life* (1995) である。この本の主張は、知能指数は遺伝(人種)的に決定され、白人と黒人の知能指数の分布を表す曲線 (bell curve) は異なる、だからアメリカは万人の平等という幻想を放棄して、それぞれの人種の知能に見合った階級社会に変化すべきだ、というものである。こうした見解に対しては、ハリスも徹底的に反論している。彼によれば、人種と知能指数の関係を説いたジェンセンイズム (Jensenism) が、1960年代の公民権運動に対する白人の反撃であったように、ハーンスタインらの主張は1990年代のアメリカの保守化を象徴している。そしてハリスは、知能指数を指標とする文化差の研究を「ボアズ以前」(pre-Boasian) と呼び、言語道断だと述べている (Harris 1999: 79-97)。ボアズ以降、アメリカの人類学者が後天的に獲得される文化の重要性を繰り返し説いてきたのは、こうした疑似科学に基づく人種

主義 (scientific racism) が後を絶たないからである。

- 9) ロザルド (Renato Rosaldo) は、1921年から1971年までの半世紀を、人類学の「古典的時代」と呼んでいる (Rosaldo 1989: 32)。この時代区分の理由は明確ではないが、恐らくマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』と、ラドクリフ＝ブラウン (A. R. Radcliffe-Brown) の『アンダマン諸島の人々』が出版された1922年を起点としていると思われる。その後の動きについては、第1章「古典的規範の崩壊」と第2章「客観主義以降」が特に参考になる。
- 10) 1996年12月、カリフォルニア州オークランド市 (Oakland) の教育委員会は、Ebonics を標準英語とは「別の」(separate) 言語として認め、それを標準英語普及の手段として公立の学校で補助的に使うことを提案した。この提案は保守派から強い反発を招き、全国的な論争へと発展した。なお Nanda and Warms 以外にも、多くの教科書がこの事件を取り上げている。
- 11) 今日でも二つの分野にあまり接点がないことは、心理人類学会 (Society for Psychological Anthropology) の会長を務めた面々が、教育人類学会 (Council for Anthropology and Education) に、会員として殆ど名前を連ねていない事実からも伺える (Guide 1998-1999, the American Anthropological Association. 機構的には両学会とも AAA の subsection である)。長年、心理人類学と教育人類学の掛け橋として活躍したスピンドラー夫妻 (George D. Spindler and Louise Spindler) は、むしろ例外的存在であった。詳しくは、心理人類学会のジャーナル *Ethos* と、教育人類学会の *Anthropology & education quarterly* を比較のこと。なお日本では、1970年代に当時の心理人類学のメッカ University of California, Los Angeles (UCLA) で研究し、東京大学教育学部教授の地位にあった箕浦康子が、人類学と教育学の接近に努めた。
- 12) だが、モース (Marcel Mauss) が『贈与論』でマリノフスキーの描いたクラに注目したのは、前近代経済における給付 (prestation) が、「全社会的現象」であることを示すためであったという指摘はない。この点は他の教科書も大体同じである。マリノフスキーの機能主義の民族誌的基礎は、クラが単なる物々交換のシステムではなく、軍事、法律、道徳、呪術/宗教など、一見経済とは関係ない制度と密接に結びついているという観察にあった。この事実は学説的に重要なので、見落としは許されない。また、交換理論に占めるモースの古典的地位に関しても、アメリカの教科書の記述は軽すぎるように思う。これと対照的なのが、イギリスの教科書である。最近出版された Joy Hendry, *An introduction to social anthropology* (1999) を読むと、いかにイギリスの人類学者がデュルケム (Emile Durkheim) とモースに多くのものを負っているか、よく理解できる。今日、イギリスの社会人類学とアメリカの文化人類学は、もはや区別を失うほど接近したが、両者をいまだに分けるものがあるとすれば、その一つはデュルケムとモースの知的遺産に対する意識の差ではないだろうか。
- 13) Nanda and Warms の補遺「(7) 生態学的唯物論」の項には、次のような一節がある。フリード、サーリンズ、サーヴィスらは、「バンド一部族-首長制-国家というモデルを作り、それは多くの現代人類学 (および本書の多くの場所で) 頻繁に使われている」(p. 374)。また著者は次のように書いている。「生態学的唯物論は、現代人類学に強い影響力を持ち続けている。バンド一部族-首長制-国家のモデルや、ハリスの文化唯物論は、ほぼ全ての人類学の教科書に用いられており、この分野の多くの議論の基礎となっている」(同)。
- 14) 家長と後継者のラインを構造の核とする日本の「イエ」は、household と英語に訳されることが多いが、household は「世帯」も意味するので混乱を招く恐れがある。また単に family と訳すと、「イエ」の日本の特徴が見落とされてしまうので、私は the ie と表現するのが良いと思う。英語圏の学者にもっとも分かりやすい区分は、イエ=ie, 家族=family, 家庭=home, 世帯=household であろう。なお「ウチ」に関しては、「ソト」との対比で the inside と訳し、それが文脈によって「イエ」「家族」「家庭」「世帯」をも意味するところに、日本の特徴があることを指摘すべきだろう。この点については、アメリカのバクニック (Jane M. Bachnik) の考察 (Bachnik and Quinn 1994 に収録) に詳しい。
- 15) Nanda and Warms が言及したのは、アブ＝ルゴッドの実験的民族誌 *Writing women's worlds* (1993) である。この本の前書きで、著者はベドウィン (Bedouin) の女性の会話をナラティブとして再現することで、従来の「民族誌的類型化」(ethnographic typification) の切り崩しを目指すとしている (p. xvi)。アブ＝ルゴッドによれば、「父系」「一夫多妻」「父方平行イトコ婚」といった用語では、ベドウィンの女性の人間的な側面は表現できず、

彼女らの世界は非人稱化されてしまう。そこで、アプ＝ルゴッドは極力専門用語の使用を避け、ナラティヴそのものに従来の理論を批判させるという戦略を取った。だが通読してみると、ナラティヴの中に理論が埋もれている印象を受け、地域の専門家以外には著者が何を問題化しようとしているのか、あまり明確ではないという欠点がある。

- 16) 注1に掲げた21冊のうち、ジェンダーに関して独立した（またはタイトルの一部に「ジェンダー」の語を含む）章を設けたものは12冊ある（Bates and Fratkin 1999; Crapo 1996; Ember and Ember 1999; Ferraro 1998; Harris 1997; Harris and Johnson 2000; Keesing and Strathern 1998; Kottak 1997; Kottak 2000; Nanda and Warms 1998; Peoples and Bailey 2000; Rosman and Rubel 1998）。この12冊のうち、1990年代前半に出版された旧版を入手したものは9冊あり、そのうちの3冊（Ember and Ember 1990; Ferraro 1992; Nanda 1991）は、ジェンダーを独立した章として扱っていなかった。
- 17) これと対照的なのが、第12章の「国家」の説明である。後に見るように、著者は国民国家、支配的文化、エスニシティ、ナショナリズムの関連を「操作主義」の立場から論じている。この立場が、文化を「作られ」（produced）「競合し」（contested）「交渉された」（negotiated）ものと見るポストモダニズムと親和的關係にあることは、著者が「現代世界における国民国家」というセクションの冒頭で認めている（p. 263）。文化は人類学の中心概念だから、文化観が変化すれば、個別テーマ（例えばジェンダー）のアプローチも、当然変化すべきである。
- 18) 例えば、私が1982年から1989年まで学んだ UCLA の人類学部と社会学部は、同じ建物（Haines Hall）の3階と2階にあったが、両者には全くと言って良いほど交流がなかった。当時、社会学部にはエスノメソロジーのガーフィンケル（Harold Garfinkel）がいたことを考えると、奇妙な没交渉である。
- 19) 但し、アニメティズムの代表的例であるポリネシアのマナについては、「3霊の世界と聖なる力」に説明がある。また「6宗教の実践者」には、「個人的宗教」の特徴である「幻追求」（vision quest）や、「聖職者の宗教」の聖職者の例が掲げられている。
- 20) Nanda and Warms には古典的研究への言及が少なすぎる。例えば、通過儀礼の概念がファン＝ヘネップ（Arnold van Gennep）に依拠していることは明確にされてないし、「模倣呪術」と「感染呪術」の区分を提唱したフレイザー（James G. Frazer）にいたっては名前すらない。学説史を詳しく論じることは教科書の目的ではないが、たとえ対象が初学者であっても、古典の軽視は思想的な浅薄さにつながると思う。
- 21) 但し、言及された学者の扱いには随分と差があり、踏み込んで説明したもの（例えば Radcliffe-Brown）と、ただ名前を出しただけのもの（例えば Evans-Pritchard）がある。
- 22) 注1と注3でも触れたが、アメリカの教科書は非常に高価であり、部数も大量にさばけるので、ビジネスとして「うまみ」がある。そのため、古い知識を切り売った教科書が、商業的理由で少なからず出回っている。この手の教科書の執筆者には、概して研究者として評価の高くない大学教師が多く、先行の教科書の叙述を「孫引き」する 경우가少なくない。学会では事実上放棄された一部の進化論が、いつまでも教科書で語られる理由の一つは、この辺の事情と関連していると思われる。なお、ギアーツに代表される観念論派や、ポストモダニストが教科書を著さない一つの理由は、最先端の研究をしているという自負心が、「教科書屋」（textbook writer）であることを許さないためであろう。アメリカの学会では、この言葉に大きなスティグマがついている。
- 23) インゴルド（Tim Ingold）は、アメリカとヨーロッパ大陸の一部には、イギリスの人類学をマリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウン、エヴァンズ＝プリチャードらと同一視して、彼ら以降は何の進展もないと考えている節があると指摘している（Ingold 1996: x）。
- 24) 第一の問題について、例えば親族理論にはアフリカのバイアス（African bias）があるように、人類学の理論には地域的な偏りが多く見られる。アメリカの教科書には共通なパターンがあり、どの理論を説明するときには、どの地域のどの部族／民族の例を用いるかが大体決まっているので、これを詳細に検討すれば「劇画的な」鳥瞰図が得られ、人類学理論の脱地域化に貢献できるだろう。また第二の問題について、私は日本の表象に関する予備考察を既に発表している（桑山 1996, 1998）。

文 献

- Abu-Lughod, Lila
1993 *Writing women's worlds: Bedouin stories*. Berkeley: University of California Press.
American Anthropological Association
1995-96 Science in anthropology. *Anthropology newsletter*, April 1995-September 1996.
- Bachnik, Jane M. and Charles J. Quinn, Jr. (eds)
1994 *Situated meaning: Inside and outside in Japanese self, society, and language*. New Jersey: Princeton University Press.
- Benedict, Ruth F.
1934 *Patterns of culture*. Boston: Houghton Mifflin. (『文化の型』米山俊直訳, 東京: 社会思想社, 1976)
1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin. (『菊と刀』長谷川松治訳, 東京: 社会思想社, 1948, 1972)
- Brown, Donald E.
1991 *Human universals*. New York: McGraw-Hill.
- Clifford, James, and George E. Marcus
1986 *Writing culture: The poetics and politics of ethnography*. Berkeley: University of California Press. (『文化を書く』春日直樹ほか訳, 東京: 紀伊国屋書店, 1996)
- Dumont, Louis
1980 *Homo hierarchicus: The caste system and its implications* (complete revised English edition). Chicago: University of Chicago Press. (orig. 1970)
- Durkheim, Emile
1965 *The elementary forms of the religious life*, translated by Joseph W. Swain. New York: The Free Press. (orig. 1915) (『宗教生活の原初形態 (上・下)』古野清人訳, 東京: 岩波書店, 1975)
- Freeman, Derek
1983 *Margaret Mead and Samoa: The making and unmaking of an anthropological myth*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (『マーガレット・ミードとサモア』木村祥二訳, 東京: みすず書房, 1995)
- Hall, Edward T. and Mildred R. Hall
1987 *Hidden differences: Doing business with the Japanese*. New York: Doubleday.
- Harris, Marvin
1999 *Theories of culture in postmodern times*. Walnut Creek, California: AltiMira Press.
- Hendry, Joy
1999 *An introduction to social anthropology: Other people's worlds*. London: Macmillan Press.
- Herrnstein, Richard J. and Charles A. Murray
1995 *The bell curve: Intelligence and class structure in American life*. New York: The Free Press.
- Ingold, Tim (ed.)
1996 *Key debates in anthropology*. London: Routledge.
- Kroeber, Alfred L.
1923 *Anthropology*. New York: Harcourt, Brace and Company.
1948 *Anthropology: Race, language, culture, psychology, prehistory*. New York: Harcourt, Brace and Company.
- 桑山敬己 (Kuwayama, Takami)
1996 「アメリカの人類学の教科書と日本人像」『Newsletter 文化人類学』(財団法人 民族学振興会) 3, 14-15。
1997 「『現地』の人類学者——内外の日本研究を中心として」『民族学研究』61(4), 517-542。
1998 Theoretical problems in the representation of Japan. A paper delivered at Oxford

- Brookes University, Oxford, June 15, 1998.
- 1999 「相対主義と普遍主義のはざままで——人権を通してみた文化人類学の世界」中野毅編『比較文化とは何か——研究方法と課題』pp. 200-236, 東京：第三文明社。
- Malinowski, Bronislaw**
- 1984 *Argonauts of the Western Pacific: An account of native enterprise and adventure in the archipelagoes of Melanesian New Guinea*. Prospect Heights, Illinois: Waveland Press. (orig. 1922) (『西太平洋の遠洋航海者』『世界の名著59——マリノフスキー・レヴィ＝ストロース』寺田和夫・増田義郎訳, 東京：中央公論社, 1967)
- Marcus, George E. and Michael M. J. Fischer**
- 1986 *Anthropology as cultural critique: An experimental moment in the human sciences*. Chicago: University of Chicago Press. (『文化批評としての人類学』永渕康之訳, 東京：紀伊国屋書店, 1989)
- Mauss, Marcel**
- 1967 *The gift: Forms and functions of exchange in archaic societies*, translated by Ian Cunnison. New York: W. W. Norton. (『贈与論』『社会学と人類学 I』有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳, 東京：弘文堂, 1973)
- Mead, Margaret**
- 1961 *Coming of age in Samoa: A psychological study of primitive youth for Western civilization*. New York: Quill. (orig. 1928) (『サモアの思春期』畑中幸子・山本真鳥訳, 東京：蒼樹書房, 1976)
- 1963 *Sex and temperament in three primitive societies*. New York: Dell. (orig. 1935)
- Moore, Henrietta L.**
- 1994 Understanding sex and gender. In Tim Ingold (ed.) *Companion encyclopedia of anthropology: Humanity, culture, and social life*, pp. 813-830. London: Routledge.
- Nanda, Serena**
- 1991 *Cultural anthropology* (4th ed.). Belmont, California: Wadsworth Publishing.
- Nanda, Serena, and Richard L. Warms**
- 1998 *Cultural anthropology* (6th ed.). Belmont, California: Wadsworth Publishing.
- Pinker, Steven**
- 1994 *The language instinct*. New York: William Morrow. (『言語を生み出す本能(上・下)』椋田直子訳, 東京：日本放送出版協会, 1995)
- Radcliffe-Brown, A. R.**
- 1964 *The Andaman islanders*. New York: The Free Press. (orig. 1922)
- Rappaport, Roy**
- 1984 *Pigs for the ancestors: Ritual in the ecology of a New Guinea people* (a new, enlarged edition). New Haven: Yale University Press. (orig. 1968).
- Rosaldo, Renato**
- 1989 *Culture and truth: The remaking of social analysis*. Boston: Beacon Press. (『文化と真理』椎名美智訳, 東京：日本エディタースクール出版部, 1998)
- Said, Edward W.**
- 1978 *Orientalism*. New York: Random House. (『オリエンタリズム』今沢紀子訳, 東京：平凡社, 1986)
- Tannen, Deborah**
- 1990 *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York: Morrow.
- Tobin, Joseph, J., David Y. H. Wu and Dana H. Davidson**
- 1989 *Preschool in three cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- Wallace, Anthony F. C.**
- 1966 *Religion: An anthropological view*. New York: Random House.
- Yanagisako, Sylvia and Jane Collier**
- 1987 Toward a unified analysis of gender and kinship. In Jane Collier and Sylvia Yanagisako (eds) *Gender and kinship: Essays toward a unified analysis*, pp. 14-50. Stanford: Stanford University Press.